

## ～牛ふん堆肥を利用した 安心・安全・安価・良質な米生産に取り組む～

「阿久比米」をもっと消費者へ提供したい

澤田裕（さわだゆたか）さん 阿久比町  
水田作

【平成22年4月9日掲載】

阿久比町で牛ふん堆肥を利用して「阿久比米」を生産している澤田裕さん（写真1）を紹介します。



写真1 澤田 裕さん

### 1 農業を始めたきっかけ

澤田さんは、農協勤務を経て一般企業に転職された後、平成7年に就農、水田作を始めて14年目になります。

農業は、サラリーマン時代、仕事で帰りが遅く、子どもの顔がみられなかったのをきっかけに、子どもの成長をみるために始めたそうです。

現在、水稲作付け20ha、全作業受託5haで、奥さんと2人の家族経営です。

### 2 経営の特徴

澤田さんの経営の特徴は、平成18年から始めた、牛ふん堆肥を利用した米の生産です。

「堆肥は、土の中にいる微生物のエサであり、5年かけて水田の微生物を復活させたい。」という目的で始めたそうです。

水田に堆肥を10a当たり2t施用し、散布面積は、初年度の18年が2.2ha（散布量44t）、19年は5.8ha（同116t）、20年は11.3ha（同226t）、21年は15ha（同300t）と年々、面積を拡大されています。19年に、堆肥利用組合を設立し、大型の自走式マニュアルスプレッダや直接堆肥が投入できるダンプベッセルを導入されたのが、面積拡大の要因です（写真2）。

澤田さんの目標は、10年間、同一ほ場で堆肥を施用し、トータルで10a当たり20t施用することによ

り、水稲作において、化学肥料の使用をゼロにすることです。

また防除については、育苗箱施薬や除草剤は化学合成農薬を使用しますが、極力、本田防除等は減らしています。

省力化技術の取組としては、20年から、冬季代かきによる水稲不耕起V溝直播栽培を始め、21年は6ha取り組まれました。もちろん、直播きのほ場においても、すべて堆肥を入れて、化学肥料施用量の低減を図っています。



写真2 散布機への堆肥投入（左）  
散布作業（右）

### 3 「阿久比米」への思い

澤田さんは、「消費者と顔の見える関係が大切。堆肥を利用することで、必ずしも自分の米を高く売りたいわけではない。堆肥を有効に使うことにより、消費者に安心・安全・安価・良質な米を提供したい。そのためには自分が生産した「阿久比米」をもっと消費者に知ってもらい、食べて欲しい。（写真3）」と語っていました。



写真3 阿久比米（左）  
精米作業（右）

執筆・取材協力  
農業経営課、知多農林水産事務所農業改良普及課